

太宰府の文化財

(382)

戒壇院境内の石塔

— 中世律宗の影響をうけた五輪塔部材 —

十四世紀

観世音寺に隣接する戒壇院の境内の石塔について紹介します。戒壇院境内の南西に火輪、水輪が組み合わされた塔があり、これを便宜的に1号塔とします。もう1つは本堂の西側に、僧鑑真の供養塔とも開山塔とも伝わる五輪塔（仏教で使われる供養塔、墓石の一種で地・水・火・風・

空の五大要素を表すパーツで構成される）があり、これを2号塔とします。1号塔は花崗岩製で、表面は無文で彫刻や銘文はありません。火輪、水輪で構成されて、別の塔の相輪の破片が火輪の上に置かれています。塔の高さは83・7cmです。

2号塔は花崗岩製で色々な石塔の

パーツを組み合わせて作られています。使われた五輪塔の空風輪と火輪は古いものですが、地輪、水輪は別の新しいものです。塔の高さは157cmです。

1号塔の火輪、水輪、2号塔の空風輪、火輪を調べると、空風輪や火輪、水輪の形状やバランスが整っていること、復元した五輪塔の大きさが150〜180cm以上の大きくなること、無銘で種子（仏を表す文字）がないことなどの特徴があります。これらの特徴は中世律宗の本拠地である奈良県西大寺やその関連寺院で見られる石塔と多くの共通点があることから、戒壇院境内の2つの石塔は、中世律宗（西大寺流）の影響を受

けた五輪塔を使って造られたものといえます。

古代の戒壇院は、観世音寺に属し「天下の三戒壇」として著名であり、鑑真以来の戒律を伝える日本を代表する寺院の1つです。観世音寺は平安時代以降、天台宗の影響が強いとされていますが、同時期の戒壇院については文献資料も少ないため実態がよくわかっていません。この2つの石塔がどのような経緯をたどり戒壇院に存在しているのか詳しくはわかりませんが、大宰府の中世史を考えるうえで重要な意味を持つ石造物といえます。

文化財課 高橋 学



1号塔



2号塔